

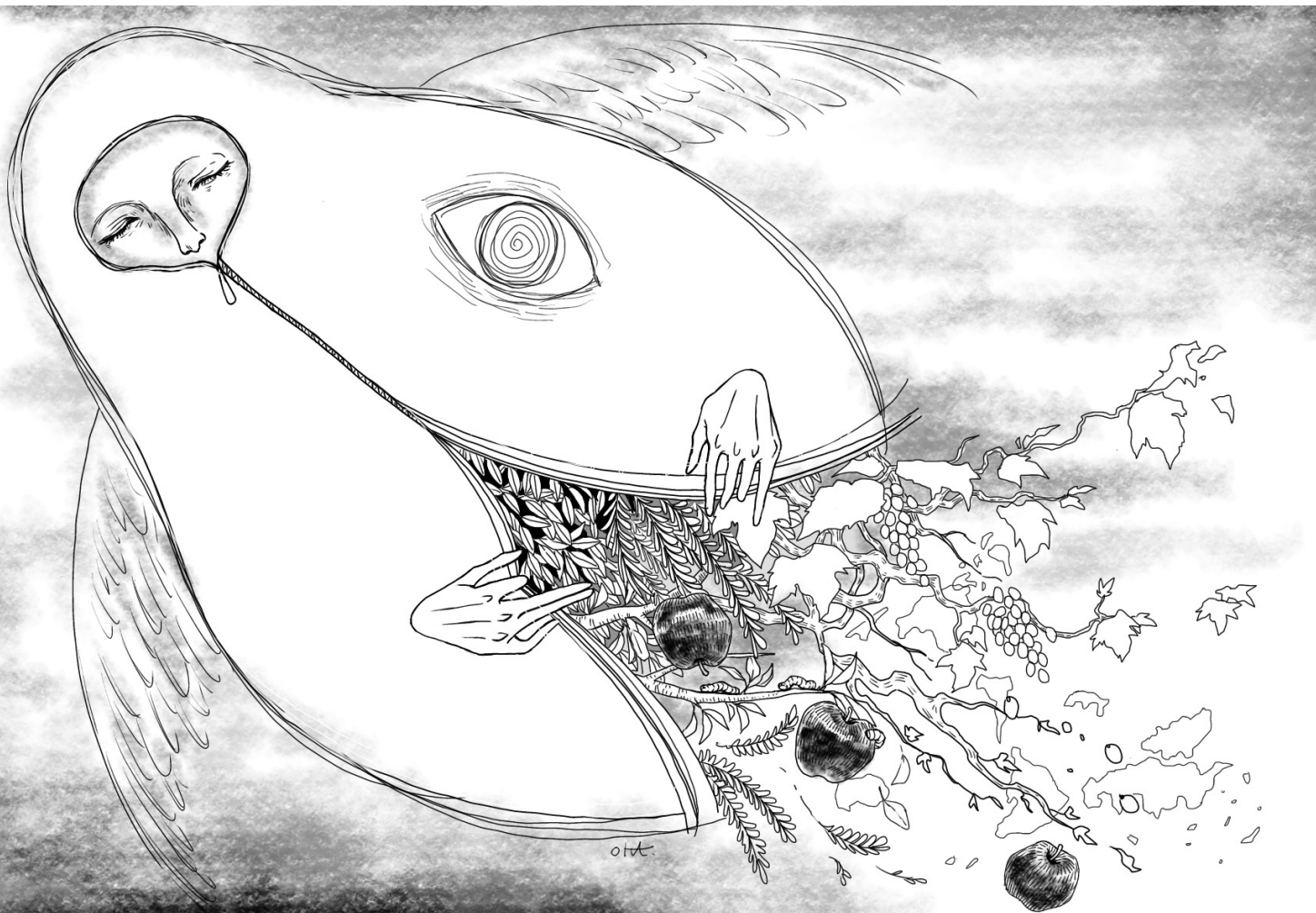
K S K Q

イマージュ

2026年1月

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行



イラスト/OKA

態変 BRAIN2

作・演出・芸術監督＝金満里

システムアーキテクト＝時里充

音楽＝ボロット・バイルシェフ (楽曲提供)

※巻上公一プロデュース作品「チュルク・カバイ」より

_underline (楽曲提供)

扇町ミュージアムキューブ CUBE 01

2026年

2月20日(金) 19:00

2月21日(土) 13:00

2月22日(日) 11:00 / 17:00

2月23日(月祝) 13:00

2026年が明けました。おめでとう御座います。

2025年に『BRAIN（ブレイン）』として産声を上げた作品が、今年の年明け早々の2月『BRAIN 2』として次なる展開を担う使命をもって『BRAIN（ブレイン）』を踏襲しつつ、その先にある成長を果たす物語をお届けします。

今生きている我々の現実とは、世界を覆う戦争という経済のからくりで絡め取られ、ともすれば富裕層と貧困層の二極に分断されその範疇にしか生きられない錯覚を持たされていると思います。

現にこの日本も、アメリカの金魚の糞のような役回りを、小躍りしながら有頂天なこれまでに見たことのない首相の軽薄さの演出を、見せつけられるまま、我々はなすすべを失わされています。

富裕層に近づけ！貧困層に落ちるな！といった無言の圧力が、笑いながらやって来る、ブラックジョークに、圧倒的権力の前に頭を垂れるしかないのか？
持たざる者の命の躍動は取り戻せないのか？

そんな中で態変身体は、命が如何に型からはみ出た部分にあるかということ、制御の利かない身体表現でもって、観ている側に蘇らせる、稀有な芸術を創ることに邁進してきました。

そして前作の『BRAIN（ブレイン）』で、態変が脳をも身体の中を含み込んだ身体を創り上げたのは確かです。

そこでは、一人は全体のために・全体は一人のために、というイメージを形作りたく、そして、今こそ、それができるのではという直感が、私にはありました。

脳が命令する主で、そこからの司令は一極集中的に一方的に、頭から下の身体へ向かって行くもので、身体はその脳に従うだけの従者、という脳の優位主義が一般の通念ですが、これまで態変はその捉え方を否定してきました。

それは身体障害者の身体が存在は、その脳からの司令を受け付けられないばかりか、反対の動きをするところが大きいにあります。そんなところを社会は、劣なる存在、とみ

なしてきたのです。

だから、表現となったときに、態変は、既存にある脳と身体の価値観をひっくり返し、身体は脳よりも既にいろんな状況に対して判断し身を守る術がある。なので、身体が主である身体表現を創っていいこう。そのためには脳を黙らせ身体の方が優位に立てるように捉え、創ってきたのです。

そこで『BRAIN（ブレイン）』ではようやく身体として脳も一緒に有る関係を、表現で模索する時が来たのです。

身障者とりわけ脳性マヒ者に魅力を感じて私は身体表現を創ってきたのですが、だからこの脳の問題が、世の進歩や発展といった現代の差し掛かる価値をつぶさないといけないし、もっと違う方向であるべきだと考えています。

ですから『BRAIN（ブレイン）』で創ることのできたものは画期的です。

それは、脳性マヒのパフォーマーの身体は、全体の中の一人の身体が尖っているのですがそれが尖るほど、そのギクシャクが刺さり合うのではなく取り入れ包み込むことで、とんでもない全体が現れ巨大になるということです。

そして今回『BRAIN 2』では、戦争をしたがる身体とは徹底的に真逆な、戦争ができない・したくない身体を善しとします。そこでは弱さを補い合い、共に考え合う身体性があるはず。そのためには、大いなる旅に、危険を承知で、何度でも出発するのです。海の中から、未組織だったぶよぶよの、ただの浮遊物から、結合と離別をくり返し個体の組織や器官を持ち、海から陸地に上がる地球の中の生物が産まれ、またその場となるこの地球。

この地球が宇宙にとって、どちらが含まれるではなく、共に声を聞きあっている。そんな壮大な話へと近づきたい。そのように思います。

是非ともお立ち会ってください！

金満里

ベルーハ山の如き霊力

巻上公一

「脳」をテーマにした態変の作品『BRAIN(ブレイン)』を国際芸術祭あいち2025で観た。

音楽は、ぼくがプロデュースした南シベリアはアルタイの音楽トリオ「チュルク・カバイ」のアルバムからである。

一昨年チュルク・カバイの静岡県公演に来てくれた態変主宰の金満里さん。天性の勘で、「いいに違いない」と大阪から、遠出して来てくれたのだ。

西洋でも東洋でもない文明の交差点のような南シベリアの地は、かつて栄えたスキタイの黄金が眠る地である。紀元前3世紀頃のバジリク古墳群には男女のミイラが埋葬されていて、脳と内臓、筋肉を除去してミイラとして納められている。男子の一体には、両手と胸背部及び右足に四足獣や怪獣、魚などを表現した黒色の刺青があった。ぼくはこのミイラを奇遇にも、静岡県立美術館で2005年の「アルタイの至宝展」で実際に見ている。そして、チュルク・カバイは、この遺跡のことを歌にしている。

石積みの墓標に囲まれて

いにしえのわがアルタイがまどろんでいる

石の枕に頭を休め

わが先祖の英雄たちが眠っている

おーい わたしの英雄よ

その歌は、低く唸るような独特の喉声でうたわれ、魂を癒やし、次なる復活に向けたシャーマニックな祈りのようである。

態変の『BRAIN(ブレイン)』の舞台上、流れてくるこの音楽は、地面に這いつくばる態変の演者の姿と見事に呼応していた。

場面では、「遠い記憶の彼方」から、「地にかえれ」まで、這う身体そのものが、屹立するアルタイの山々と共鳴していた。

そして、金満里さんは、ロシアとカザフスタンの境にあるアルタイ山脈の高い峰4506メートル、ベルーハ山の如き霊力を漂わせていた。それはまさにバジリクの時代に埋葬されたと思われるウコク高原の水の中から発見された王女のミイラの蘇りではなかっただろうか。

ステージでは、演者はチョコレート色の泥にまみれていき、ニコライ・レーリツヒの青を纏った身体は、最大限の力で、鈴を鳴らす。

ニコライ・レーリツヒは、20世紀初頭の画家であり、探検家であり、神秘主義者であり、アルタイの地にシャバラという理想郷があると唱えた人物である。また、バレエの古典『春の祭典』の初演の装置と衣裳を担当している。彼がアルタイの山々を描いた絵画には多くの青が使われているため、レーリツヒの青と呼ばれている。

金満里さんが「チュルク・カバイ」の音楽に直感的に興味を抱き、使用してくれたことは、「脳」の深部に眠っていたものを飛翔させる舞台にふさわしかったのだと思う。

AIと真に遭遇した舞台『BRAIN』に触れる

—underline—

国際芸術祭「あいち2025」の愛知県芸術劇場小ホールで『BRAIN』が公演される日がきた。

初日に出向いた。過去に態変では「虎視眈眈」の舞台美術をさせて頂いている。稽古場の状況からは、本番の舞台の完成形を僅かしか伺えないということを、そのときに学んでいた。

観劇において強く印象に残ったのは、空間の全体を覆う、深い闇の広がりだ。これが、もう一人の楽曲提供者ボロット・バイルシェフの音と絡み、意図された照明による造形美と相まって、身体障害者である演者たちによる完成されたロードムービーの情景へと観者を招く。哲学史上、美学は、感性的結晶の挑戦である(美)と、自然界の驚異である(崇高)に分かれるが、崇高を取り込んだ美の表現が前半部ですでに沸点に達する。効果的な照明による光で照らされ、ときに微かに浮かび上がる、演者たちの姿や表情という対比。一枚の絵画のように、強く記憶に焼きついた場面もある。この前半部ですでに完成されているからこそ、時里充によるAIの登場がより一層驚きをもたらす。

そのAIの登場とともに流された音像群を自分は作成した。かつて、人間に対し反抗的な自然であろうとした音をベースとしている。自然からは生の脈動を想像されるかもしれないが、それは人の手が介在していない崇高に属するという観点からオブジェクトに近く、その感触を強めるために音の質感の冷やかさを重視した。アンフラマンズな官能を音をもって実在させる手続きによるものだが、詳細は別稿に譲る。

自分が音を、崇高という偶然性を用いてオブジェクト化することで鉱物化させたノイズの位置に、AIは初めからあったことが関心事になっていた。そして、舞台『BRAIN』は、これまで飽くなく脳と戦ってきた態変がそのこと自体と向き合った作品と語られている。これらすべてに、自分は関連を感じていた。態変は『BRAIN』において、人工知能、文字通りに人工である知性的な鉱物、AIと、真に遭遇している。観者は『BRAIN』で、その稀有な現場に立ち会えた、そう考えている。

さらに、あくまで重要なのは、アンサーだ。主宰金満里による態変、その芸術観に遭遇できるのが、次回公演『BRAIN 2』である。

おと
下村雅哉

あそこから、音がした。ネコかもしれない。
雨 かもしれない。
ことが始まる前、見えない前、
いつも静かだ

母体から、生まれる瞬間、その発する声は、響き渡る。そして、歓喜の渦に、暖かい眼差し。

だが、私は、その声を発することが出来なかった。降り注ぐ雪にも、消された。沈黙の中に、緊張と不安な眼差し。

学校時代、手を高くして歩く時、足音は、意外と、強く振動した。走ると、好奇の目が、ヒタヒタと。
スピードを上げると、なおさら、一層増していく。なぜか、その驚く視線を楽しんでいた。

季節が巡り、群衆の中を横切る車いす。無関心な視線が音をも押し殺されるような。

「スースー」という金属音を残して、群衆を縫って行く
人並みの間から、空が見える。

しているが、障害があるからこそ出逢いや経験があり、私という人間が形成され、今と、態変のパフォーマーの私が存在する。

そして数々の苦労や辛さは、人として成長するためのステップで「お前なら乗り越えられる！」と、宇宙に選ばれた試練なのかもしれない…。

生きていく
向井望

わたしは生まれる前から「生きていけない」「子だと医師に言われた。母はお腹にいるわたしが「産みたいー」と言っていると感じたという。初めてわたしを腕に抱いた時、「温かくて柔らかくて、そのなんともいえない重さが私にいのちを感じさせた」という。

「あなたは望まれて生まれてきた」と伝えたいと、わたしは「望」と名付けられた。命のかたちはいろいろだけれど、いのちのはじまりは皆同じ。人は生まれてくると生まれてくる。誰もが地球に望まれて生まれてくる。生まれてこなければよかったいのちなどない。だから、わたしは堂々と前を向いて生きていく。

誕生した、地球
山崎 ゆき

自然の命の美しさ、この世は数億年かけて、海の中で命が誕生しました。

海に残った命は、バクテリア、魚など生き物へと生まれ、陸に登った命は、植物、昆虫へと育っていきました。

地球上の生き物は、絶滅から再生を繰り返し、人類が誕生しました。

ブレイン（脳と身体）を今年の 9 月、愛知で公演した時に考えて書いて、身体で表現した後から、私は集中力が増してきました。

それは、自分が自分の中で感じている所です。

パフォーマーのつぶやき お題

生命の始まり 命のかたち

脳性麻痺のたわごと
池田勇人

僕は、脳性麻痺だ、一生治らない、父、母、妹、従兄弟は健常者である、「僕の足」をみて「オカマ」みたいとよく言われた、ガニ股で男らしく、正々堂々の健常の男に負けんと強く生きろと言われた、「なんで？」いつもおもう、「健常者」は、アホやがな、なんで、僕たち、「障害者」が、「健常者」に、こびうって生活しなくてはならん？常に健康な人間は、見たことがない、かといって、健常者にこびる必要はない、「障害者」に生まれたこと、堂々としとけばいいのである。

以前は、いつべんに色んなことをやっている、と、慌てて身体も大きく動いていました。

そこが変わり始めてきました。慌てているのに落ち着いて、集中して、考えて、動けるようになりました。

アリと未来の自分
渡辺 綾乃

たまごのアリと未来の身体
ここは、緑いっぱい村
小さな生物たちがたくさんいる
卵のかたちは様々

そこに人間の生命が生まれる
いろんな想いをもち身体もバラバラ。
それが一つ一つ繋がりは始める

ここに生きる私
井尻 和美

私は仮死状態で生まれ、重症黄疸で、脳性麻痺としての人生を歩む事になった。

両親は誕生を待ち望んでいた我が子が、障害者とは想像もしていなく、当然ショックだったと思う。

それで座る事も出来ない私をなんとか歩かせようと、母におんぶされ、毎日訓練に通っていた記憶が薄っすらとあり、お陰で小学校入学時には軽く走れるまでになった。

現在は老化と障害の重度化で足腰が衰え、車椅子を使用しているが…。

障害は不自由で不便で悔しい思いは

神』という話に「命の蠟燭」という描写があり、生命を初めて意識した。大小の蠟燭が寿命を現し、短くなった自分の蠟燭に長い物を継ぎ足そうとして、誤って火を消してしまうのだ。

次に「生命」を強く意識したのは、態変に出会った時だった。重度の役者たちが、集会した場所の床にごろごろと横たわって、重い言語障害の言葉で介護に指示し、何かを行う様に、凄いきるエネルギーを感じた。

特に故・木村年男さんの、床を蹴り、足の皮を削つての床面での表現は凄まじく、正に生命の塊のようだった。

木村さんには及びませんが、38 年舞台に立ってきた、自分なりの生命を舞台上で現したいと思います。

2 月に、扇町ミュージアムキューブで、お会いしましょう。

5 歳位になるとフリガナ付きの本を読むようになって、子供落語の本の『死

『BRAIN 2』 抽象的身体表現の極致を本拠地・大阪で

国際芸術祭「あいち2025」で9月に世界初演した『BRAIN』は500名を超えるお客様にご来場いただき、大好評のうちに幕を閉じました。本作を実際に観劇したプロデューサーより招聘され、来年2026年5月には、韓国・ソウルのMODU芸術劇場での再演を予定しております。これは、態変にとって約15年ぶりとなる海外公演となります。

この成果を踏まえ、態変はさらに新たな身体表現の地平を切り拓くべく、大阪・扇町ミュージアムキューブで上演する最新作『BRAIN 2』に挑みます。

『BRAIN』では、人工知能(AI)の急速な発達と社会への浸透に対する問題意識を出発点として、身体としての「脳」を捉えなおし、身体と脳とのもつれた関係性の来歴を描き出しました。

『BRAIN 2』では、引き続き、人類の進化の流れに反して「直立すること」を選ばなかった芋虫的存在を軸に、生命誕生から人類の出現、そしてAI

が監視と制御を担う未来社会まで、38億年のスケールを一気に横断し、進化史の「もうひとつの可能性」を探ります。

とりわけ、前作に関するインタビュで金満里が度々話題に上げた、「人類が進化の末に戦争をしている」という現実、そして「AIが人殺しの道具へと組み込まれている」状況を踏まえ、本作では「戦争」のテーマをより深く掘り下げます。作品後半、AI管理都市が姿を現し、AIと人との戦争が勃発します。そんな中でも地面に張り付くことしかできない寝たきりの身体、その行方は、いかに——。『BRAIN』から変化した新たな結末をお届けします。

本作は、具体的な物語からより抽象的で独自の身体表現へと歩みを進め、寝たきりの姿勢や転がりを持つ魅力が詰まった作品です。これまで態変の作品を追いかけてくださっている方も、まだ馴染みのない方も、42年間にわたり追求してきた身体表現の革新を、ぜひ劇場で目撃してください。

態変制作部

《アフタートーク・ゲスト紹介》

毎回好評の金満里とゲストによるアフタートークを全4回行います。 ゲスト紹介by制作部

【20日 19:00の回】

時里充(アーティスト)

『BRAIN』に続き、本作でもシステムアーキテクトを担当するアーティスト。山口情報芸術センター(YCAM)所属。画面やカメラをめぐる実験的な探究を通して、認知や計量化といったデジタル性を題材とした作品を制作・発表している。小林暲とのユニット「正直」などでライブパフォーマンスも精力的に行なっている。

【22日 17:00の回】

_underline (Rubber Artist)

本作に音楽を提供してくださっているアーティスト。Art Player (Art Fetish) & Fictions / Experimental Artist 2002年、Experimental DJ、2003年、工業用ラバーを用いたノイズアクション、2010年以降、第二の皮膚とも呼ばれるLatex Glovesを用いた身体拡張による一時的造形を開始。実存と結びついた多重性でのアンフラマンスな個のイリュージョンを表現する。

【21日 13:00の回】

今貂子(舞踏カンパニー倚羅座主宰)

京都を拠点に、国内外で精力的に活動する舞踏家・振付家。1980年-94年に白虎社に参加。2000年ワークショップを母胎に舞踏カンパニー倚羅座結成。2020年今貂子舞踏公演『金剛石-Diamond-』にて文化庁芸術祭優秀賞受賞。日本の芸能の源流である「たまふり(命の活性化)」の力に支えられたアヴァンギャルドな舞踏の探究を通じ、独自の境地を開拓。

【23日 13:00の回】

斉藤綾子(ダンサー)

1990年大阪府生まれ。幼い頃から踊りに親しむ。大阪芸術大学舞台芸術学科舞踊コース卒業。関西を拠点ダンサーとして活動し、多くの作品に参加。自身の主な作品は「夢の跡」「Les Sylphides」「書くとか歩くとか」「ほねのかげ」など。サイトウマコト作品の振付助手も務める。令和3年度京都市芸術新人賞を受賞。2015年には、「さなぎダンス #6」に出演し、メタモルホールでパフォーマンスを行っている。

態変賛助会員制度（2026 年度）会員募集

態変は賛助会員制度による自主運営・公演活動を開始して 14 年目を迎えました。私たちは、最重度の身体障害者の身体から生まれる独自の表現をさらに深め、社会へ広く届けていくために、今後も創作に力を注いでまいります。2026 年度も、態変賛助会員としてご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

●年会費● 個人会員 …… 一口 5,000 円 法人会員 …… 一口 20,000 円

●入会方法● （郵便振替）同封の振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ劇団態変

(PayPal) メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用頂けます。

態変 HP →日本語 TOP「賛助会員制度」にお入りください。



会員特典

- ・会員証発行
- ・態変公演ダイジェスト映像 DVD 進呈（年 1 回）
- ・態変公演チケット 500 円引き

「異文化の交差点・イマージュ」vol.93



態変が『BRAIN』を世界初演した国際芸術祭「あいち 2025」。この芸術祭が画期的だったのは「あらゆる先住民の歴史、文化、権利、尊厳を尊重する。人の属性を理由として差別する排他的言動とその根幹にある優生思想（生きるに値しない命があるというあらゆる考え方）を許容しない。」というステートメントを掲げたことにあります。

本号の巻頭対談は、このステートメントの作成に大きな役割を果たしたマユンキキと金満里が語り合いました。

他には、

- 態変『BRAIN』の劇評
- 11 月に金満里が韓国で行なった講演「態変 42 年の軌跡 — 優生思想に抗い最先端の芸術を追求」
- 関西でダンスなどの身体表現が活況を呈する場を創ってこられた大谷燦さんの追悼特集

など、必読の中身でお届けします。

◎講読のお申し込みは、同封の振替用紙をご利用ください。態変 HP から PayPal ご利用も可能です。

2026 年 5 月 韓国公演 黒子募集

韓国・ソウルの MODU 芸術劇場に招聘され、2026 年 5 月に韓国公演を行います。

そこで、態変の公演を裏側から支える、黒子として活躍して下さる方を募集します。

渡航費および宿泊費は主催者によって負担されます。

興味のある方は、お気軽に下記の電話番号またはメールアドレスまでお問い合わせください。

渡航期間：2026 年 5 月 12 日（火）～ 19 日（火）

稽古期間：公演までの日曜・祝日 11:00 - 18:00（応相談）

申し込み・問い合わせ：態変 office イマージュ

Tel 090-6664-8615（担当：小泉）

Email taihen.japan@gmail.com

態変第 81 回公演

扇町ミュージアムキューブ提携事業 『扇町ミュージアムキューブ 2025 ラインナップ』

BRIN2

作・演出・芸術監督
システムアーキテクト
楽曲提供

金満里

時里充

ボロット・バイルシェフ (*巻上公一プロデュース作品
「チュルク・カバイ」より)
_underline

2026 年

2月20日(金) 19:00 ★

2月21日(土) 13:00 ★

2月22日(日) 11:00 / 17:00 ★

2月23日(月祝) 13:00 ★

★の回の公演終演後、金満里とゲストによる
アフタートークを開催(ゲスト紹介はp.6へ)

会場 扇町ミュージアムキューブ CUBE01

(大阪府大阪市北区南扇町6-26)

◎大阪メトロ堺筋線「扇町」駅

5番出口から徒歩3分

エレベータは北改札から2番出口

扇町公園の中を南下して扇町通を横断

◎JR環状線「天満」駅から徒歩7分

◎JR「大阪」駅から徒歩15分



チケット(日時指定・全席自由)

【前売り】 一般 4,000円 障害者／介助者 各 3,500円 25歳以下 2,500円 12歳以下 1,000円

【当日】 一律 4,500円

チケット購入方法

- ① 態変 <https://www.asahi-net.or.jp/~tj2m-snjy/form/ticket.html>
※当日精算 06-6320-0344 (留守番電話の場合はお名前と電話番号をお残してください。)
taihen.japan@gmail.com
- ② Peatix <https://taihenbrain2.peatix.com>
※当日受付で電子チケットまたはチケットを印刷してご提示ください。
- ③ チケットぴあ <https://t.pia.jp/pia/ticketInformation.do?eventCd=2542104&rlsCd=001&lotRlsCd=>
※セブンイレブンでのチケット発券(別途発券手数料要)



※ 態変賛助会員証提示で受付にて500円払い戻し

※ 各種割引は当日受付にて要証明書提示

※ 障害者は手帳をお持ちの方。介助者は同伴者1名まで

※ 車いすのままご観覧いただける席は各回4席限定。事前に態変にご連絡ください

表紙イラスト／OKA

編集人(返送先)：イマージュ 金満里 小泉ゆうすけ 仙城真

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15

tel/fax 06-6320-0344

e-mail taihen.japan@gmail.com

定価 50 円

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4F